

## 少雨に関する水田の水管理について

平成19年7月9日

北海道農政部

平成19年7月9日11時30分札幌管区气象台発表の「少雨に関する北海道地方気象情報第1号」によると、一部地域では6月はじめから、また6月中旬頃からは太平洋側西部と日本海側を中心とした広い範囲で、雨の少ない状態が続いています。さらに、今後も1週間程度は雨の予想がなく、雨の少ない状態はさらに続く見込みです。

水稲では、各地で冷害危険期を迎えておりますので、深水管理と漏水防止を徹底し、次の事項に留意し、適切な水管理に努めてください。

## 少雨に関する北海道地方気象情報 第1号

平成19年7月9日11時30分 札幌管区气象台発表

(見出し)

北海道地方では、6月中旬頃から雨の少ない状態が続いています。この状態は少なくとも今後1週間程度は続く見込みです。農作物の管理に注意して下さい。

(本文)

北海道地方では、一部地域では6月はじめから、また6月中旬頃は太平洋側西部と日本海側を中心とした広い範囲で、雨の少ない状態が続いています。今後も1週間程度は雨の予想がなく、雨の少ない状態はさらに続く見込みです。農作物の管理に注意して下さい。

6月9日から7月8日まで(30日間)の降水量と平年比(速報値)

| 地点名  | 降水量(ミリ) | 平年比(%) | 地点名 | 降水量(ミリ) | 平年比(%) |
|------|---------|--------|-----|---------|--------|
| 稚内   | 11.0    | 19     | 釧路  | 85.0    | 76     |
| 北見枝幸 | 32.0    | 44     | 根室  | 148.0   | 157    |
| 羽幌   | 29.0    | 45     | 寿都  | 29.5    | 48     |
| 雄武   | 23.0    | 35     | 室蘭  | 16.0    | 12     |
| 留萌   | 14.5    | 27     | 苫小牧 | 16.5    | 13     |
| 旭川   | 38.5    | 62     | 浦河  | 47.0    | 42     |
| 網走   | 67.0    | 112    | 江差  | 29.0    | 32     |
| 小樽   | 11.0    | 21     | 函館  | 48.5    | 52     |
| 札幌   | 36.0    | 64     | 倶知安 | 11.5    | 19     |
| 岩見沢  | 47.5    | 76     | 紋別  | 45.0    | 63     |
| 帯広   | 46.0    | 52     | 広尾  | 93.0    | 54     |

## 「少雨に関する水田の水管理について」

6月以降、太平洋側西部と日本海側を中心とした広い範囲で少雨傾向が続いているが、水稲は各地で冷害危険期を迎えているので、深水管理と漏水防止を徹底する。

また、今後も1週間程度は雨の予想がないと見込まれているので、以下のとおり適切な水管理を行う。

### 1 かんがい用水の有効利用について

- (1)入水は、地域で設定された通水日に確実にを行う。
- (2)地域内でかんがい用水の不足が生じないように、地区や水田毎に入水時間帯をずらす等の工夫をする。

### 2 冷害危険期の水管理

- (1)低温から幼穂を保護するために、最大18～20cmの深水管理を行う。
- (2)深水を維持するために、漏水箇所を点検し、早急に補修する。

### 3 冷害危険期終了後の水管理

- (1)かんがい用水量の不足が予測される地域では、登熟期間の土壤水分を確保するため、中干しは行わないで、水深3cm程度の湛水状態を維持する。
- (2)かんがい用水量の不足が無く、土壤還元が激しかった水田では、必要に応じて一時的に落水し、中干しを行う。

### 4 登熟期前半の水管理

- (1)出穂開花が始まったら、急速に子房(玄米)が肥大するため十分な土壤水分が必要となるので、かんがい用水量の不足が予測される地域では、引き続き水深3cm程度の湛水状態を維持する。また、かんがい用水量の不足が無い場合は、必要に応じ間断かんがいを行う。
- (2)登熟期前半の高温は、心白粒・腹白粒・乳白粒の発生をまねき玄米品質を低下させることがある。北海道では、高温と登熟期の干ばつ害が複合して発生することが多いので、出穂後20日以内に、日中29℃以上で夜間も23℃以上になる日が5日以上続くと予測される場合は、湛水状態とし、稲体周辺の気温を下げる。

### 5 登熟期後半の水管理

- (1)穂かがみ期まで完全落水を避け、湛水状態を保つか、間断かんがいを行う。
- (2)穂かがみ期以降、完全落水とするが、かんがい用水量の不足が予測される地域では、登熟に必要な土壤水分を確保するために、自然落水とする。
- (3)完全落水後も登熟期間の土壤水分を保つために、必要に応じて走水を行う。